

第33回保育学会大会に出席して

松 山 依 子

去る5月17日(土)、18日(日)の両日に亘って、第33回日本保育学会大会が、北九州の西南女学院短期大学において開催された。

全国から参集した会員数は、全会場を埋めつくし、盛会であった。当番校の諸先生方のご尽力に対して改めて感謝の意を表したい。

本大会の特色として、記念講演に、大阪教育大学教授の高木俊一郎先生の「幼児の発達と教育—総合的把握」を、はじめとして、障害児問題のシンポジウム、および、研究発表が相当数を占めていた事は注目に値する。

全国各地における障害児教育のさまざまな問題が提起され、今後の新しい保育の課題として、ますます、研究の充実をはかり、今後の統合保育の発展を期さなければならない。

一方、保育内容に関するシンポジウム、および、研究発表においても、各領域別毎に、きめこまかい研究が行われ、発表数も260余りと、現場の保育者の立場と、研究機関との共同研究形式のものも、その数を増している。

専門領域の細分化と、奥行きを深さを感じさせられる内容のものが多く、今後、更に、幼保一元化を目ざしながら、保育学の巾広い、層の厚い発展を期待できそうに感じた大会であった。

以 上

〔口答発表要旨〕

統合保育にみられる一考察

白鷗女子短期大学 松 山 依 子

研究目的：近年、障害児の就園、就学が一般化し、各地に於ける統合保育の問題が、さまざまな形態をとりながら、現場においてもケース毎に、それぞれ異った様相を呈している。折しも栃木県小山市においては、教育委員会の企画によるところの「心身に障害をもつ子ども」の教育に関する提案が採択されて、本学附属幼稚園に委託された情緒障害児 1 ケースの統合保育の 2 年間の記録をたどりながら、今後に残された障害児の統合保育の一考察を試みたい。

研究方法：

(1) 研究対象……事例研究

4 才 10 ヶ月の男児（H・A）（S49 年 1 月 23 日生）

(2) 研究期間

昭和 53 年 1 月 10 日～昭和 54 年 12 月 6 日

(3) 研究方法としての保育形態

- a S53 年 1 月 10 日～53 年 3 月末日までは、3 年保育 22 名の中に中途入園。
- b S53 年 4 月～54 年 3 月までは、再び 3 年保育の 16 名と保育。
- c S54 年 4 月～現在（55 年 3 月まで）は、年長組 33 名（男 18 名、女 15 名）に在籍。

研究結果：

心理検査結果

- a 知能検査 S-Binet

第 1 回施行 S 53 年 10 月 26 日 4 才 9 ヶ月

知能指数 I Q 53 MA 2 : 6

b 知能検査結果 S-Binet

第 2 回施行 S 54 年 7 月 6 日 5 才 5 ヶ月

知能指数 I Q 77 MA 4 : 2

c 社会成熟度指数 S Q 86 S 54 年 11 月施行 5 才 10 ヶ月

d 公開保育 (研究発表)

(イ) 第 1 回 S 53 年 12 月 7 日

統合保育 (3 年保育), 登園時～降園に至るまでの 1 日の全保育
の公開に基いて, シンポジウムを行った。

(ロ) 第 2 回 S 54 年 12 月 6 日

統合保育 (年長組) 通園バスの送迎を含め, 自由保育の一部, お
よび, 一斉保育における健康の領域によるところの平均台を使用し
てのグループ競技を展開した。その後, 前回と同様, 2 年間に亘
る統合保育の総括についてのシンポジウムが行われた。

考 察:

小山市教育委員会から委託を受けて, 2 年間に亘って行われた統合保育
の実践記録は, そのまゝ情緒障害児の, 一人歩きの過程を示すものでもあ
る。以下に本研究の被験児の事例紹介を記しながら, 統合保育の効用につ
いて吟味していきたい。

(1) 事例研究

a H・A (男) 昭和 49 年 1 月 23 日生

(イ) 生育歴

- ・ 出生時—正常分娩 生下時体重 3,250g
- ・ 栄 養—混合～人工 ; 離乳 0 : 6
- ・ 始歩期—0 : 11
- ・ 始語期—4 : 00
- ・ 病歴・既応症—0 : 3 に熱性けいれん初発, その後数回発作がみられる。

- 脳波測定－１：９ 異常なし。若干の脳波の乱れが認められて、１時期投薬を受ける。
- 健康状態－風邪をひきやすいが、身体発達は、ほぼ正常である。

(ロ) 就園前の被験児の観察記録

小プレールームに、市教委相談員石川が、同室して観察を行った。

(約25分)

全く声を出さず、表情の変化もなく、視線を合すこともなく、ひたすら動きまわり、水道栓の開放、掃除機をひきまわすなど、多動性が著しかった。

その後、被験児を１人にして、室外から、テレビカメラを使用して、音に対する反応を観察する。玩具を出して遊んでいる被験児に、マイクを通して、呼びかけても反応を示さないが、強く手をたたくと、音の聞こえる天井の方を見る。しかし、母親に名前の呼びかけをしてもらったが、それには答えず、同じく母親に「クックはいて」と、マイクで呼びかけてもらうと、それには反応して、上履をはいて室から出ようとする。

(ハ) 生活習慣の自立(就園後)担任の記録

•排泄（Ｓ53年１月～３月）

衣服の扱いは自分でできるが、排泄時間を、指示しない場合には失禁することが多い。

(Ｓ53年４月～７月)

失禁の回数は減少し、自己調整が多少できるようになった。

(Ｓ53年９月～11月)

自己調整がほぼ完成し、時折り遊びに夢中になった場合に失禁がみられる程度。下着の交換も自分で始末することができる。

(Ｓ54年４月～12月)

遊びに夢中になっている時に声をかけても「でないよ」と、ぎりぎりまで抑制するが、命令口調で「おしっこに行っていらっしゃい」と、告げると、トイレに駆けこむ。

(二) 家庭生活 (就園後) 母親の報告

(S53年1月～3月)

- 入園後、言葉で指示したことを理解した上で、行動に現わすようになる。
- 妹(2:0)と喧嘩をしても、以前のように幼い子に乱暴しなくなり、皆からほめられてる。
- がまんして失禁してしまうと、悲しそうに泣き感情の表出がみられるようになる。

(S53年4月～7月)

- 妹の面倒をみるようになる。
- 情緒の発達が著しい。大声で笑ったり、怒られるとしょんぼりする。恥しそうな表出もみられる。
- 言語の発達は不明りようながらも、口真似がみられるようになる。

(S53年8月～10月)

- 親の目にも成長のあとが、はっきりと伺える。ことに、言語の発達が著しい。
- 体力の向上に伴って、友人関係の力の均衡に問題がみられる。

(S54年4月～7月)

- 口がまわるようになった。
- 妹の友達と遊ぶようになった。
- 同年令の友人がほしい。
- じゃんけんはできるが、勝敗や、ゲームのルールは理解できない。
- 排泄をがまんしすぎて失禁することがある。

(S54年9月12月) 5

- 園の近所にいる友人と、よく遊ぶようになる。
- 近所の友人の家への道順も理解でき、案内することができる。

(ホ) 友人関係(園生活)

(S53年1月～3月)

- 友人の遊んでいる積木をこわしたり、遊具をとったりする行動が多く、

怒った友人に追いかけてられても、笑って逃げて同じことを繰り返す。

- 仲間との交流がなく、興味にひかれて、フラフラと歩く。
- 人見知りや人の顔の区別なく、誰にでもなつく。

(S53年4月～8月)

- 周囲の行動に目が向けられるようになるが世話のやりすぎをして、もめることが多い。
- 特に仲の悪い子を憶えたり、友人の弁別が確立される。友人間の力関係を理解するようになる。
- フラフラ歩きが減少する。

(S54年4月～11月)

- 友人関係を保つための工夫を試みるようになる。
- 友人から級のメンバーとして認められるようになる。

結 論：統合保育の一つの試みとして、2年の歳月の中で、一人の被験児の成長にかゝわりをもった。

多くの力があってこそなし得た、一つの成果を報告し、ご批判、ご叱正を得て、今後、更に、次の成長へと歩を進めていきたい。

本研究にご参画いただいた、小山市教育委員会、附属幼稚園、短大の諸先生方に、謝意を表し、御礼を申し上げ、研究の報告にかえたい。

(出所：日本保育学会第33回研究発表論文集、362—363頁。)

(日本保育学会第33回大会口答発表要旨)

ある保育者の保育行動の検討 —— 1日の保育をVTRで追って ——

○中 谷 陽 子
(白鷗女子短大)

杉 浦 千恵子
(あおぞら保育園)
伊志嶺 美津子
(いわき短大)

〔目 的〕

保育者は、子どもに最も強い影響を及ぼす人的存在としての保育環境である。その保育行動は、それが意図的、または無意識のいずれであっても、保育者の内なる子ども観、価値観、教育（保育）理念によって裏づけられている。本研究は、ある保育者の保育行動を検討し、その行動の意味、教育的意図を探り、そこから保育の質を考察することを目的とする。

〔方法・対象〕

横浜市の民間保育園（1～5歳児100名定員）の3歳児クラス（15名）の担当保母（経験13年）を対象とし、度々の現場の保育参観を重ねながら、夏休み直前（1979.7）の終日の保育及び、それに続く園内研究会をVTRに収録した。その後さらに収録結果をもとに、担当保母と検討を重ねた。

〔保育の背景〕

保母の基本姿勢：この園では日頃から保母同士の意志疎通が極めて十分に計られており、保育理念及び保母の基本姿勢の一致のための努力が重ねられてきている。第32回大会での報告にも示した如く、5項目からなる保母の「基本姿勢」には、次の柱が盛りこまれている。

(1)保母は徹底的に子どもの立場にたつ。

(2)ひとりひとりの子どもをしっかりと見つめ、子どもの要求を大切にする。

(おちこぼれない集団をめざす)

(3)ひとりひとりの発達段階を大切に、子どもの個性が、集団の中で良さとして発揮できるような集団作りをめざす。

(4)子どもの伸びようとする力を全面的に信頼し、それをよりどころとして保育をすすめる。

(5)子どもと子ども、保母と子ども、父と母と保母、保母同志が卒直にものを言い合い行動できるよう、集団の中の民主主義を確立する。

年間保育の流れ：各年齢ごとの子どもの発達段階をもとに、各々の年齢の子どもが乗り越えるべき発達の節目を考慮して、年間保育のねらいが構成される。3歳児の場合、次のような年間計画がたてられる。

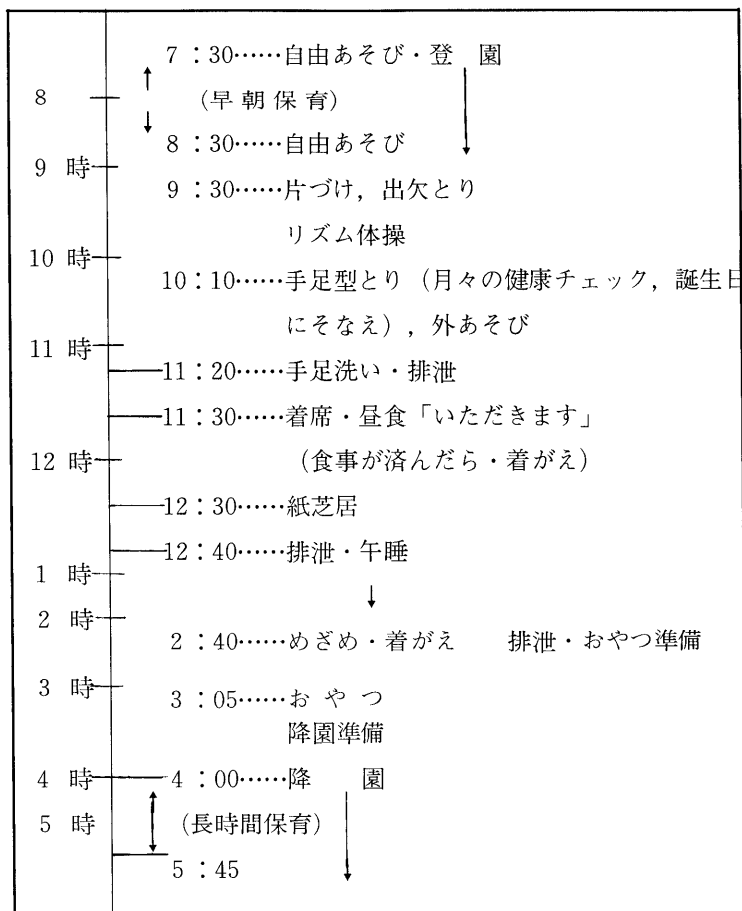
- 第1期（4～6月）：個の充実。保母との信頼関係を作り、その中で身体活動を楽しみながら、自己の力を思いきり発揮する。
- 夏期（7～8月）：さらに解放的生活の中で、存分に楽しく遊び、体力づくりを行う。
- 第2期（9～12月）：集団の形成。運動会への取り組みや表現活動、協同製作を通して、友達と協力し、楽しい相互の関わりを発展させていく。
- 第3期（1～3月）：個と集団の充実。遊びのルールを学び、互いに「がんばった」「自分の力を発揮した」という喜びを体験させる。小グループのまとまりから、クラスとしてのまとまりに発展させる。

⑩今回のVTR収録は、第1期終了の頃、保母との関係がしっかり結ばれて、楽しく安定した状態の中で、自分らしい行動や力が発揮できるようになった時期のものである。

〔保育行動の検討〕

VTR収録日の保育は、次表（子どもの動きを追った保育の流れ）に示す通りだが、時間的配分は一斉保育（1日20分程、クラス全体がまとまって行動する）、生活のための活動（食事、睡眠）を適切な時間帯に位置づけ、それ以外の十分な時間で、子どもの自由な活動（あそび）を保障し、これらす

すべての保育活動の中でひとりひとりの子どもの力が発揮され、また自己の持つ課題を乗り越えられるような、きめ細かい指導が行われている。



保育者の動きは、大別すると、教育的活動、そのための事務的活動、諸雑用になり、ここでは特にその中の子どもと直接関わる教育的活動について検討を加えたわけである。

保育者の行動は、子どもの生活の最も基本になる三つ、つまり「あそび」と「睡眠」と「食事」に集中し、さらにその全般に配慮されている「ことば

かけ」，また保育時間の前後に持たれる「父母との連携」などに主力が注がれている。

父母との連携：子どもの24時間を相互に把握して，交流することを重視する。父母が気軽に保育の場をのぞくことを歓迎し，すべての保母と父母が仲よくなるなど，朝夕の接触を大切にして情報を交換する一方，保母と父母の間の親しい雰囲気が育ってきている。その他連絡帳の活用を十分にし，月1回（土曜日の夜）懇談会を開くなどの方法も活発に行われている。

あそび：一日の保育の最も中心は，あそびである。

まず一斉保育について。3歳児の場合，一日に20分程度のクラス全員による「集中活動」は，この時期のテーマである。保育内容はリズム体操。保母の弾くピアノやレコードにあわせ，保母が先にたって体を動かすなど，一斉保育においては，モデルとしての保母の行動や，意図的に次々と取り入れた楽しい遊びを通して，保母が仲だちとなって個々の子どもに「やる気」を起こさせること，また「仲間と一緒に行動する楽しさ」を徐々に体験させることを期待し，時間も子ども達のその時期の気持ちにあわせて，さらに長くなることも計画されている。

次に自由保育。研究資料を集めている頃に展開された外あそびに象徴されるように，子ども達は外あそびに集中し，泥んこあそびとままごとが展開され，あそびのためには，雨あがりの園庭，砂，十分な水，ままごと道具などが使用された。また「はだし、やあそびに邪魔な衣類の脱衣など，全身であそびに取り組むことを目指している。また一般に言われるように「子どもが自分の力を十分に出しきる場」というあそびの価値を十分に認識して，さらに「納得いくまで遊びこむ体制」を整えて，真のあそびの実現をも目指している。それらは，個々の子どもの発達要求に合致した遊びの意図的動機づけや満足いくまで遊べる十分な時間，また教材の量などによって保障されると考えられる。自由保育は，個々の子どもが自分の課題を乗り越え，次のステップへ挑戦していく場だということが確認される。

あそびの後片づけ：

生活習慣の一作業としての意味だけでなく、十分に遊びきったあとの片づけの意義は、次の遊びや活動の見通しを持つところにある。保母のかけ声に応じて、子どもは精神的にも非常に集中して、今までの遊びに区切りをつけ落着いて自主的に取り組む、意味ある活動だととらえられる。

このことから、子どもの要求を満たさなかったり、具体的見通しを持たない一方的で、おしつけの片づけ指導は、子どもに受け入れられない。

食事指導：食事に対する個々の子どもの条件（個人差が大きい）に大切にに取り組む。おいしく、早く、上手に食べられる子どもに対して保母はともに喜び、指導の重点は食べられない子どもに向けられる。時間をかけても食べられる子には、「食べよう」とする本人の意志を尊重し、十分に時間をとり気ながに応援する。

また、食べない子には、本来「食べたい」と思っている本人の気持ち（つきつめれば、生きる力）を、本質的な子どもの要求と判断して取り組む。時には厳しい態度、強引き、そしてまたはげましの行動が伴う。

その一方で、「食べたくなるほど遊ばせる」という方針を保育の中で実行する。がんばって食べられるようになったときの本人の満足、賞讃、乗りこえたときの発達のひろがりなど、子どもの発達を信じて、因果関係を読みとっての保育活動がうかがわれる。

睡眠指導：家庭での睡眠を含めて（24時間の生活の中で）「睡眠のリズムの確立」が目標である。家庭における十分な睡眠が園での活動を充実させ、十分遊んだ後の午睡は次の活動のエネルギーになる。「睡眠不足」は、単に生理的不快感をよぶだけでなく、友達関係がうまくいかない、活動が不十分で充実感が味わえないほどの結果を招く。したがって、眠くなる程の十分な遊びと家庭への徹底指導を行っている。

また、併せて着脱衣の指導がある。個々の能力ややる気を高める方向に進め、適切な言葉かけ、介助、見本提示、順序だて等に心くばりをしながら、自分で着脱することを目標にしている。

ことばかけの意義：保母は常に明るい雰囲気で、「応答的」であることは

意味深い。保母との信頼関係が充実するうえで、さらに保母からの「ことばかけ」があり、特に子どもが乗りこえるべき課題を持っている場合の保母のことばかけの役割は大きい。ことばかけは、否定的、命令的ではなく、「はげまし」を含んだ肯定的表現が取られている。

〔結 論〕

保母の目標である保育の基本姿勢が、保育行動の中核として、どのように実現されているかについて検討してきたわけであるが、それらをまとめると

(1)保母は多忙な労働条件下にいる。園は子どもの生活の場であるから、保母の保育活動の多くは雑事に流されやすく、その中で教育的意図を高く揚げて歩むには、保母ひとりひとりの強い信念、理念と健康、体力そして保母間の一致連携が必要である。

(2)年間の保育の流れを考慮するにあたって、集団の形成に先がけて、3歳児保育では「個の充実」が重視されるべきである。集団の中にあって自己が充実され、そして力が発揮できるとき、はじめて集団の意味がありと言える。

(3)保母は同時に集団の形成にむけて力を注ぐことが極めて大切である。幼児は友達があつてはじめて、力が発揮できる。やる気が出てくるのであるから、友達からの影響を重視しなければならない。3歳児において、個人差の大きい各人を保母が十分に把握でき、しかも子ども相互間の活力が生まれてくることを考えると、3歳児の集団規模は15名が適当であろう。

(4)子どもが「見たい」「聞きたい」「やりたい」という要求を持って、「やりたい事に熱中」できることは、現在の子ども達に強く求められている姿である。それを実現させるために、保育の場で「あそび」が十分に保障されるべきである。

(5)乳幼児期までの課題は、食べること、休息すること、そして遊ぶことの基本3項目である。保母はこの当り前で、しかも最も子どもの生活の中核をなす3つの柱の相互関係を絶えず認識し、園だけでなく、家庭も含めた24時間のサイクルの中で、このリズムを確立することが必要である。我々の周辺では、この相互関係の崩れた子どもの問題が表面化しており、保育現場もそ

れらへの対応がせまられている現在である。

以上のように保母の保育行動を見つめる中に浮き彫りにされたいくつかの現実や課題を、明日からの意義ある保育の研究テーマとして取り組みたいと考える。

（出所：日本保育学会第33回研究発表論文集， 112～113頁に
掲載した文章に若干の加筆修正を加えた。）